

書誌探求のツーリズム

樋 上 勲

I はじめに

書店巡りを始めて半世紀近くになるが、特に学生の頃は近くに古書店があったので、時々立ち寄り参考書を安く買って喜んだものである。いつの頃からか、東京やその他の地方へ行った時などに、当地の書店に立ち寄り貴重な文献を購入するようになった。本稿では主として海外における書誌探求の経験と経緯について述べることにする。

II アメリカ

筆者が初めて渡米したのは1972年に神戸市の姉妹都市であるシアトルに高校生を引率した時であるが、当時、語法研究に役立つ *Webster's New International Dictionary of the English Language, the Second Edition* を市内の古書店で探したが見つからなかったので、結局、*The Bon Marche* の新刊書店で *Webster's Third New International Dictionary of the English Language* を購入することになった。規範的な説明の多い二版とは違って三版は記述的な説明がなされていて、例えば、砕けた口語表現で時折耳にする *ain't* について、〈*you ain't going*〉〈*things ain't what they used to be*〉〈*it ain't raining*〉〈*he's here, ain't he*〉〈*I ain't ready*〉のような用例を示し下記の説明を付加している。

- though disapproved by many and more common in less educated speech, used orally in most parts of the U.S. by many cultivated speakers esp. in the phrase *ain't I*.

姉妹都市の親善行事や日米の高校生が集う学生会議を無事終えて帰路につき、サンフランシスコとロスアンゼルスに立ち寄り観光を楽しんだが、合間を縫って書店廻りも怠らなかった。特にロスアンゼルスの *Everybody's Book Shop* で *John Carroll* の *Language and Thought* と *H. L. Mencken* の *The American Language, Supplement I & II* と *John P. Hughes* の *The Science of Language: An Introduction to Linguistics* を購入することができた。

キャロルは心理言語学者として言語と思考の関係を行動主義的な面から習得、認知、意味などを分析し、いわゆる言語相対性の仮説については否定的な意見で、次のように述べている。

To sum things up, the linguistic relativity hypothesis has thus far received very little convincing support. Our best guess is that the effects of language structure will be found to be limited and localized.

メンケン言語学者ではないが新聞記者として若い頃から米語の特徴に興味をもち莫大な資料を集め発音、語彙、文法などの各面で米語と英語の違いを論じている。ヒューズの本は言語研究の歴史と世界の言語を概観するとともに言語の本質、構造、形態などを分析している名著である。

Ⅲ イギリス

イギリスには 1979 年に文部省（当時）の研修生として約二ヵ月間滞在した時に、イングランドやスコットランド、ウエールズの各地を巡る機会に恵まれ、多くの書店を訪れることができた。

ロンドンのチェアリングクロスの Newman 書店では、長年探していた上記のウェブスターの二版を購入することができた。二巻本で大変使いやすく現在も重宝している。

研修地のバーミンガムでは、市内の古書店を地図を頼りにあちこちと探して回った。Maxwells 書店では John Earle の *The Philology of the English Tongue* と Maxim Newmark の *Twentieth Century Modern Language Teaching: Sources and Readings* を買った。ニューマークの言語教育の本は文献としては少し古いだが、当時、筆者は外大で英語科教育法を担当していたので幾分役にたった。同書店で John Ruskin の *The Art and the Pleasures of England* も購入した。この本は 1883～85 年のオックスフォード大学での講演がもとになっている。

Stephen Wycherley 書店ではラスキンの *The Queen of the Air* を買った。この本は副題となっている *Greek Myths of Cloud and Storm* の題でロンドンの University College で著者が行なった講演に基づいている。これはギリシャ神話の研究であるが、神話は本来教訓的で倫理的暗示に富んだものであることを説いている。

同書店で他に数冊買ったが、そのうちの一冊に、ラスキンの影響を受けた Walter Pater の *Imaginary Portraits* がある。これは短篇集であるが、当時の文人達に称賛された作品といわれている。短篇の一つである *A Prince of Court Painters* の中で、人生を教会内に迷いこんだ小鳥にたとえる場面をペイターは次のように巧みに描写している。

I lingered long after the office was ended, watching, pondering how in the world one could help a small bird which had flown into the church but could find no way out again. I suspect it will remain there, fluttering round and round distractedly, far up under the arched roof, till it dies exhausted. I seem to have heard of a writer who likened man's life to a bird passing just once only, on some winter night, from window to window, across a cheerfully-lighted hall. The bird, taken captive by the ill-luck of a moment, re-tracing its issueless circle till it expires within the close vaulting of that great stone church: - human life may be like that bird too!

引用が少し長くなったが、ペイターで思い出されるのは彼の主著である *The RENAISSANCE* の結論部分で、「堅い宝石のごとき炎を燃やし続けることが人生における成功であり、失敗は習慣を形成することである」という趣旨のことを次のように述べているが、少し考えさせられる所である。

To burn always with this hard, gemlike flame, to maintain this ecstasy, is success in life. In a sense it might even be said that our failure is to form habits: for, after all, habit is relative to a stereotyped world, . . .

Birmingham Books 書店では Michael Girsdansky の *The Adventure of Language* を、更に Middleton's Bookshop では Geoffrey Leech の *English in Advertising: A Linguistic Study of Advertising in Great Britain* を購入した。

ストラトフォード・アポン・エイボンでは、シェイクスピア関連の名所、旧跡を見学し王立劇場で *The Merry Wives of Windsor* を観賞したあと、Bookservices 書店で Alfred J. Wyatt の *An Anglo-Saxon Reader* と Francis G. Stokes の *A Shakespeare Dictionary of Characters and Proper Names* を記念に購入した。

ウォリック城の見学に行った帰りに Castle Bookshop で、A. C. Partridge の *Tudor to Augustan English*, Crystal と Davy 共著の *Investigating English Style*, Logan P. Smith の *Words and Idioms*, Joshua Whatmough の *LANGUAGE A Modern Synthesis*, Max Müller の *Lectures on the Science of Language, second series* 他数冊を購入したが、ほとんどが語学関係であった。パートリジの本は Caxton から Johnson までの統語論と文体を扱ったものである。特に筆者に役立った文献はドイツ生まれのイギリスの言語学者ミュラーのものでメタファーの分析に随分参考になった。暗喩は単なる言語の装飾あるいは添加された力ではなく言語の構成的要素あることを次のように述べている。

Metaphor is one of the most powerful engines in the construction of human speech, and without it we can hardly imagine how any language could have progressed beyond the simplest rudiments. . . .

詳細は拙著『英語の構造と意味』（大阪教育図書）の第4章と第5章で論述した。

Samuel Johnson の生地であるリッチフィールドにも行った。Johnson (1709–84) は英国の辞書編集者、批評家として知られ、一般には Dr. Johnson と呼ばれていて、イギリスの生活と文化の中に溶け込んでいる。また、ジョンソンは、数々の名言でも知られていて、例えば、首都ロンドンについて、

「人がロンドンに飽きたときは人生に飽きたときである。ロンドンには人生のすべてが揃っているから。」

と言っている。これは、『サミュエル・ジョンソン伝』の著者であるボズウェルが、ロンドンに住みつけば時々スコットランドから出てきてロンドンに滞在する感激が薄れるのではないかと発言したことに対して、ジョンソンが答えたものの一部である。

“Why, Sir, you find no man, at all intellectual, who is willing to leave London. No, Sir, when a man is tired of London, he is tired of life ; for there is in London all that life can afford.”

筆者の当時の日記をみるとリッチフィールドには二度訪れている。初回は大聖堂やジョンソンの生家の見学や観光であったが、二回目は主として文献を収集する目的で行っている。

ジョンソン縁の The Staffs Educational Book Co. では、David Abercrombie の *Elements of General Phonetics* や Frederic Harrison の *JOHN RUSKIN*, Ruskin の *Sesame and Lilies*, K. C. Masterman の *The Power of Speech*, D. W. Rannie の *The Elements of Style*, James T. Lightwood の *CHARLES DICKENS AND MUSIC*, Walter Jerrold の *A Book of Famous Wits*, I. A. Richards の *Interpretation in Teaching* など主として文学関係の本を十数冊購入し、発送を依頼している。リチャーズの著書は彼が文芸批評家としてまた言語心理学者として再評価されていた時でもあり、大変参考になった。意味論を軸に言語の心理的問題、教育、解釈論へと展開していき、語用論 (pragmatics) の萌芽がみられることを、拙稿「意味の意味から解釈へーリチャーズの言語論をめぐってー」(短大紀要第8号)において論述した。

ジョンソンの *A Dictionary of the English Language* は価格が高すぎて手が出なかったが、数年後に東京の雄松堂から復刻版が出たので購入した。これは見返しに **Reprinted from the first edition (1755)** とあるように原書の感触を味わうことができる。この辞書はジョンソンが独力で8年余りをかけて完成したもので、注目される定義は多いが、一例だけあげると *oats* について、次のように、一見スコットランドに対する偏見とも思われるような定義をしている。

A grain, which in England is generally given to horses, but in Scotland supports the people.

オックスフォードにも行ったが、時間帯が悪く殆どの書店は閉まっていた一冊も買えなかった。

ランカスターでは、Hedric W. Tyson 書店で Augustine Birrell の *William Hazlitt* や G. K. Chesterton の *CHAUCER*, Charles Kent の *The Works of Charles Lamb*, Nicholas Bagnall の *New Movements in the Study and Teaching of English*, Walter W. Skeat の *A Concise Etymological Dictionary* などを購入した。スキートの語源辞典は表題どおり簡潔で使いやすい。

グラスゴウの Smith 書店ではシェイクスピア全集と Andre Maurois の *DICKENS* を購入した。全集は10巻からなり、C. H. Herford の編集による各作品の紹介と注釈がついている。モーロワの『ディケンズ』は Hamich Miles の英訳である。

エディンバラの Broughton Bookshop では William Thackeray の *The English Humorists of the Eighteenth Century* と Robert Louis Stevenson の *Familiar Studies of MEN AND BOOKS* を購入した。

バスではローマン・バスや製本の歴史館を見学した後、Edgar Baker の *Contemporary English* と Bernard Harrison の *Meaning and Structure: An Essay in the Philosophy of Linguistics* を買った。ハリソンの本は経験主義の枠組みで意味と統語構造を分析し、意味の取り扱いにおいてチョムスキー流理性主義を批判するなど興味ある読み物である。

研修最後の一週間は、個人研修として、エディンバラからインバネス、ネス湖、フォートウィリアムを経てグラスゴウ、バンゴーを経由して、スノードン、カナーボンを巡り、カーディフまで行った。カーディフでは、ウエールズ民族博物館といわれる村一帯を見学した後 The Hays Bookshop で William Francis Mackey の *Language Teaching Analysis*, Edward Malins の *English Landscaping and Literature 1660~1840* などを購入した。マッキーの本は言語理論から学習理論、教授法の分析へと様々な局面から効果的な言語教育に役立つ貴重な文献である。

イギリスには2000年にも行った。ランカスターに数日滞在したときに、以前訪れた Hedric W. Tyson 書店を探したが、市街地再開発のためか、見当らなかった。所用のあとランカスターからヨークやチェスターを巡り、ロンドンから、チョーサーの *Canterbury Tales* に思いを馳せながら、カンタベリーまで行くような慌ただしい行程であったが、帰り間際に立ち寄ったロンドンの Waterstone's Booksellers で Derek Bickerton の *Language and Human Behavior* を購入することができた。ピッカートンはクリオール語の成立過程の研究から人間の言語能力は遺伝的に体内に組み込まれたことを論証しようとした言語学者として著名であるが、本書では、言語は表象体系であるとして、人間の知性や意識の特性は言語の特性から直接派生し

ていることを論述している。

IV カナダ

1972年に初めて渡米したとき、ハワイとバンクーバーで観光を楽しんだあと、カルガリー経由でバンフ国立公園の周遊の旅を楽しんだことがある。この時のカナダ滞在は短期間であったが、1988年には語学研修の目的で短大生を引率して、バンクーバーの郊外コキットラムに約3週間滞在した。研修の一環として学生達と一緒にビクトリアやバンクーバー周辺の名所を見学したが、週末には時間的余裕があったので、周辺を散策しながら書店廻りもした。

ウエスト・ベンダー通りにある Macload's Books 書店では Richard Hudson の *Word Grammar* と Eric H. Lenneberg の *Biological Foundations of Language* を買った。ハドソンの『語文法』は語または語の連鎖以上の項目に言及する文法を認めない独自の文法論を展開している。レネバーグの本は、近年脚光を浴びている生物言語学の古典ともいわれるもので貴重な文献である。

F 451 Books 書店では Michael Riffaterre の *Semiotics of Poetry* を購入した。これは詩の記号論で、多くのフランス詩を例に、詩の意味は言語学的意味ではなくテキストの構造によってもたらされる記号体系に基づいていることを論じている。The Bonds 書店では William Safire の *On Language* を買った。サファイアーの本は、アメリカの言語について、ニューヨーク・タイムズの読者からの様々な質問に、用法、発音、文体、スラング、方言、起源などの面から答えるもので、当時ベストセラーの一つであった。

同じくバンクーバー市内の書店で C. S. Lewis の *Studies in Words* と Ulric Neisser の *Cognitive Psychology* などを購入した。特にナイサーの本は、当時、認知言語学が注目され始めた頃であったので、とても参考になった。

V おわりに

これまで年代順にアメリカ、イギリス、カナダと書誌探求の経験と経緯を述べてきた。訪れた書店は、稀覯本を取り扱うような大きな書店から場末の小さな書店まで様々で、手元の *International Directory of Antiquarian Booksellers* を見ると、大部分が掲載されていないが、購入した書籍の多くは、筆者にとって貴重な価値ある文献である。

イギリスの哲学者で文人であるフランシス・ベイコンは、『随筆集』の中で読書について次のように言っている。

Some books are to be tasted, others to be swallowed, and some few to be chewed and digested.

本稿で言及した書誌の中には「咀嚼して消化すべき」ものが少なくないが、今後、それらを十分に活用したいと思っている。